EIKŌ NEWS FLASH

発行所　栄光学園新聞部
横須賀市田浦町船越（TEL 田浦227）
印刷所　内村ライオン堂
横須賀市大滝町2/11（TEL 356）

No 28　SEPT.　1951

菊池、ウェーバー、チェルマーク　三先生日本を去る

皆が長い夏休を楽しく過していた間に、菊池、チェルマーク両先生が海路アメリカへ、ウェーバー先生は空路オランダへと、都合三先生が、思い出深い栄光、なつかしい日本を旅立たれた。

▼本年三月末本校を去られた菊池雄三先生はその後渡米の準備に忙しい月日をすごしておられたが七月三十一日夕刻横浜出港のニューヨーク航路第三船三井船舶の浅香山丸で元気にアメリカへ向われた。ロスアンゼルスまで船、留学先はミズリー州セントルイス大学院・短くて三年長くて六年間社会哲学を研究なさる・

卅日出発を明日にひかえて、手続等にお忙しい先生を見送りの中三四名と共に横浜の三井船舶の事務所にお訪ねすると、忙しい時間をさいて荷物を船室に入れかたがた船に案内して下さった。浅香山丸は以前清水沖で炎上したノルウェー船タリスマン号の改装船で六七六〇トン速度十六ノット（最高十九ノット）薄いグリーンの船体も鮮やかに岸壁に横ずけになっていた。先生の部屋は一等船室へ（但し一等船室しかない）栄光アパートの部屋よりずっと良かった事は勿論である。同行はアメリカ廻りで故国へ帰るという長年日本で英語の教師をしていたスイス人のおぢいさんだそうだ・先生の弟さんに案内していただいて船内をほとんど全部見せていたゞく。機関室ではズボンが油で汚れるのを盛んに気になさりながらも先生は皆と一諸においでになった。

船を降りてから約二時間皆先生を囲んで話し合いながら別れを惜しんだ。

○●○

次いで八月六日早朝同じく横浜出港のプレジデントライの貨物船Shootingstar号でニコラス・チエルマーク先生が日本を去られた。五日の正午近くやっと見つけたこの流星丸には、修道院の神父様が二三人それにウルフ先生とウエーバー先生が見えていた・生徒の見送りは五人。父兄が一人。この日チエルマーク先生の顔には、あの〃訓育助手〃時代の表情は全く見つからなかった・

先生のスーツケースの中には数々の日本に関係ある品があった・将棋や日本文の手紙の書き方といった本のはいっている中から引っぱり出して、「これは私が日本で最後に買ったものです」とおっしやる・はなおであった・先生は向うで下駄をはくつもりらしい・

帰りに先生は電車通りまで送りに来て下さった・「送りに来た人を送られる人が送りに行きます」と云って笑われた・

Mikulaš Cermák S.J.
West Barden College. West Barden Springs
Indiana U.S.A

●○●

レオポルド・ウェーバー先生は八月十二日午前二時羽田を出発オランダへ向われた・十一日夜八時十五分いよいよ栄光とさようならをして修道院より羽田へ、同日十一時二十分離陸が二時間半おくれて、翌十二日午前二時深夜の羽田空港よりスカンチナビアン・エアー・ラインの旅客機でローマへ向われた・

途中、バンコックへ翌日の十二時につき、一時間の後カラチへ向けて出発・カラチへは同日（十二日）の夜十二時着、そこからいよいよローマへ飛ぶ・ローマには十三日の正午に着く予定だそうで、ローマからは陸路でイタリヤ半島を北に進みロンバルヂア平原を横切ってアルプスを越え、スイスをぬけてあとはずっとライン河にそってオランダのマーストリッヒト（Maastricht）というところまで行かれる。うらやましいなあというものもずい分いると思われるが、おそらく今までに外国へ行かれた先生方のコースの中で最も良い行程と思われる・

何分にも出発が真夜中だったので、お見送りは出来なかったが、出発準備にお忙しい十一日午前、修道院にウエーバー先生をお訪ねした・先生は一年生のキャンプへいらっしゃり、そこで教え子達に別れを告げて来られたわけだが「栄光の皆さんさようなら・皆さんが立派な態度を持ち本当に親切にして下さって私も嬉しいです」と云っておられた・又先生は出発に際して絶えず「手紙を交換しましょう」と口にしていらっしゃった・

皆で栄光の学校生活がいつも先生の心の中に再現されるように手紙をお送りしましょう。

Leopold Weber S.J.
Canisius College
Tongersestraat 53
Maastricht Holland

眞の友情を

一月余りの夏休みも終り、第二学期が始まった。明るく楽しかるべき夏休みには、とかく色々の問題が起りがちなものである。

第二学期の始めに際し我々はこの色々な問題に対して我々の今迄の態度特に友人に対する態度について反省しなければならない。

我々の身体の為には、医者を始めとし他にも色々と設備があるが、我々の心が傷ついたら、誰かどこでなおしてくれるだろうか。どれ程の設備があり、どれほど活動していようか、実に恐ろしい事である。

この点本校ではこの方面を受持つ「社会倫理」は一週一時間、「公教要理」を聞いている者は全生徒の半数まで、遠くあるまい。又朝礼の訓話も、この方面に力を注がれている事も容易に断言できる。

その点に於て備っているとはいえ、充分でなかったかもしれないが、問題は突然起るものではなく長い行程があるのである・学校の空気を作っている我々は、こゝに反省しなければならない。

我々の友達に対する態度はあまりに無関心であり、無責任である。早くからこの様な空気が校内にあるのを知って、黙認しているのである。この様な事では問題が起るのもやむをえまい。何時か我々の態度に対する手痛い結果が始まるのであろうか。

こゝに必要なのは、物質的より心からの我々の友情である。堕落一歩手前の友人は、再び眞の栄光精神を学びなおさねばならない。それはその人にとって容易な事ではない。我々はその様な人に眞の友情をもって、一日も早く栄光精神を知ってもらうように助けねばならない。しかしその前に眞の友情があったなら今後も問題は起らずに済むであろう。

今迄の我々の態度を痛感し、反省する事によって、眞の友情をもって明るい栄光の雰囲気を作ろうではないか。

●●○

英語科先生異動

今まで中二の英語（リーダー）を担当しておられた鈴木先生は胸の御病気により当分の間休養なさる為次の異動があった。

○中二英語（リーダー）　百瀬先生
○高一英語（リーダー）　向井先生
○中二英語（英作文）　クルエル先生（新任）
休職　鈴木先生

尚中三英語（会話）はエレインホス先生の代りに新任スレイター先生、チェルマーク・ウェーバー両先生の代りに新任スタール先生、ネメッシュ先生がそれぞれ中一AB、中一CDの英語を担当される

外国便り　セントルイスより

お元気ですか、十六日にやっと当地に着きました・船も早く、海も静かだったので、船の旅は快適でした・或いは新聞に出たと思いますが、横浜からサンフランシスコまで十日と二十時間余という、日本船による最高記録を作りました・

サンフランシスコでもロスアンゼルスでも何でもデカイのには全く驚きました・ロスアンゼルスから当地までの汽車は冷房がしてあり、また椅子もフワフワしていたので楽でしたが、四十八時間の汽車の旅はさすがにちょっと退屈でした・窓からの景色も荒れ果てた砂漠が一日中続いたり、見渡す限りの牧場だったり日本の風景とは随分違います・

当市は古い町なので大ていの家は赤煉瓦造りで、街路樹が多く落ちついた感じの所ですが、中心地に行くと、やはり高層建築も多少見られます・ではしっかり勉強して下さい。　さようなら

（八・二一）

Yuji Kikuchi
835 Vandeventer
Pl. St. Louis Mo
U.S.A

山岳部　第四回丹沢キャンプ

中三C

去る八月十六日から二十一日までの約一週間にわたって、丹沢ホームを根拠地として行われたこのキャンプは、僕達に褒の山生活を教えてくれると同時に数々の教訓を与えてくれた。

今度の遠征隊のリーダーはシュトルテ先生、副リーダーは高一の　さんで中三の山岳部員十六名によって組織された。

十六日、大船駅発六時二十六分の湘南電車で小田原へ向い、そこから更に小田急で丹沢の山がよく見える大秦野駅に着き、バスで蓑毛まで行った。そこから直にヤビツ峠を目指して竜光聖の尾根道を急登、途中で一息入れた後、ヤビツ峠に出た。こゝで周囲の山々の赤茶けた地をむき出した奇怪な山様を見た時、僕は丹沢の山の息吹きをしみじみと感じた。峠の近道を下りきった中津川の清流を前にした木陰で弁当を開き、小一時間の休憩の後札掛へ出発した。丹沢ホーム着は十三時十五分であった。

十七日、七時半に札掛を出発し、尾根伝いに塔ヶ岳頂上（海抜一四九三・二米）に出た。頂上より一寸はずれた所の遭難者の碑に黙とうをさゝげ、龍ヶ馬場に咲く可憐な花をふみ乍ら丹沢山頂上（一五六七・一米）に来、弁当を半分食べて出発した。

先ず丹沢山の西北面を駆下り、不動峯のお花畑、鬼ヶ岩を経て神奈川県の最高峯である丹沢の盟主—蛭ヶ岳に到達した。そこで弁当の残りを食べ、記念写真を撮った後帰路に向った。帰りは塔ヶ岳一寸手前の日高でわきに入り、三角の頭の下のガ山頭を、危険なのはザイルを用いてトラヴァースし、オバケ沢へ下った・その途中滝をアップザイレンしてキュウハ沢を左に送って本谷川を三十分ほど下ると右へ入り小鐘根を越えてホームに帰った。その為に時間がかゝり、丹沢ホームへ着いた時はすっかり夜になっていた。

十八日、雨が降ったり止んだりする天気なので一日休養。午後は晴れ間を見つけて東丹沢発電所附近まで行き、そこの方の好意で中を見学させて頂いた。

十九日朝、ミサが行われた。八時二十分に出発、十七日の帰りに通ったのとは別の道をオバケ沢に出て、逆行を開始した。滝もあって気持の良い逆行の後、少し急ぐくだりをして表尾根に出たが、急に雨になったので直に札掛に下った。夜丹沢ホームの方々との交歓会でホームの人が歌う讃美歌や僕達の歌に楽しい歌の合戦が開かれた。

二十日、美しい小滝をいくつか越えて、ホームの前を流れるタラヒコヤ沢の遡行を行った。三ノ塔での展望は晴れていたので、すこぶる良く、箱根愛鷹、富士の三つの裾野や江の島、鎌倉方面までよく眺めた。そこから富士見橋を通ってホームに戻った。今夜は下の河原のせゝらぎの音を聞き乍ら営火を囲んで楽しいエネ大会が開かれた。これが丹沢で過す最後の夜だと思うと、やはり何だかさびしくなる。

二十一日、出発の時ポツ／＼降っていた雨はヤビツ峠にさしかゝる頃から豪雨となった。蓑毛からバスで大秦野まで来たが、丹沢の山はちっともその姿を見せてくれない。やがて僕達は丹沢に限りない愛着を覚えつゝも、車上の人とならねばならなかった。「丹沢よ、さようなら」と。

山岳部　八ヶ岳夏期遠征

天狗さんをリーダーとする山岳部の　（以上K2）　（以上K1）の計十三名は去る八月一日、新宿発二十三時五十五分の中央線終列車で八ヶ岳夏期遠征登山に出発した。一行は満員の汽車に揺られる事凡そ六時間、翌二日五時四十八分小淵沢駅に降り立ち、こゝで六甲山岳部一行六名と合流、更に小海線松原湖駅では六甲山岳部の先輩三名の出迎えを受けた。松原湖を過ぎ稲子湯を経て十五時三十五分、上智小屋に到着。この小屋は白樺の林に囲まれた谷間にあって昭和八年に建てられたそうだが気持のよい小屋であった。リュックを下して長く手をつけていられない程冷い谷川の水で体を洗った。三日―。一行は白樺尾根に上り見るもの全て苔におおされた薄暗い原始林を抜けて、上智岳の岩の上に立った。あたり一面ガスがたちこめて此処からの眺望はきかなかった。一行は再び原始林に入り左に折れて白駒の池に向ったが、途中白い花が一ぱいに咲いているお花畠を通った。白駒の池に着いた時には小雨が降っていて、池はその中に静かに眠っていた。夜は六甲栄光の合同エネ大会が開かれた。そして終りに六甲の山岳部から贈り物を受けた。この贈り物は六甲山の男の心の表われであって、栄光の山の男は非常に感激し両校の山の男の精神の一致が目に見えた事を非常に喜んだ。四日―。前日登った上智岳から更に原始林を進んで中山峠に至り、ここから岩とはい松の尾根を一時間程登って東天狗岳の頂上に立った。この間高山植物を採集する位の暇はなく忙しかった。昼食後、西天狗岳に足を延してから再び中山峠を通り、稲子湯を通って小屋に帰った。

横岳より赤岳を望む

五日、栄光と六甲は別れなければならなかった。六甲の一行は露営をしながら縦走する為に、朝七時十四分小屋を出発した。わずか三日間の合宿だが両校山岳部の間のザイルを愈々強くし、互に別れ行かなければならぬのはそれ故に容易なことではなかった。途中まで六甲の遠征隊を送った。そして再び小屋に戻ってからは白樺細工に一日休養をとった。六日―。七時四十分小屋を出発。稲子湯をまわって本沢温泉から夏沢峠（二三九二米）に出た。こゝから南が南八ヶ岳であって北八ヶ岳とは趣きが全く異り、植物としては、はい松とそして小さな草が所々生えているのみである。先ず硫黄岳（二七四二米）に向った。頂上に立つと今まで見えなかった横岳、主峰赤岳（二八九九米）中岳、阿弥陀岳の雄姿が急に眼前に現われる。この硫黄岳の頂上は割合に広い草地で東側は大噴火口壁の高い絶壁となり、西側も深い谷になっている。十三時五十六分こゝを出発、横岳のいくつかのピークを越して進んだ。横岳は岩場と成っていて、左右は深く谷に落込んでいる。赤岳の北側の急斜面を登って「赤岳小屋」に着いたのが十六時十二分。リュックをこゝに置き西側の大きなガレ場を下って中岳を越え、阿弥陀岳にまで足を進めた。帰り、このガレの登りはものすごく皆くた／＼に疲れてやっと上に出た時にはそこらの岩の上に坐りこんでしまった。七日―。赤岳小屋の一夜を明した。外は非常に寒かった。ガスは次第に上の方へ昇って行きつゝあり、今まで騒いでいた谷川の音がだん／＼と消えて行った。五時五十九分、東の方が急に明るくなり、真赤なそして大きな太陽がガスの中に現われた。美しい山頂の日の出であった。誰から始ったともなく、皆、天狗隊の歌を合唱していた。朝食後、七時四十五分小屋を出発し、前日のコースを逆にとって上智小屋に向ったが、途中における展望はすばらしかった。東には悠然と構える秩父の山々、北には雲海に浮ぶ谷川岳、奥日光の山々、そして浅間の噴煙。西には、白馬、槍、穂高、乗鞍、御岳などを始め、北アルプス、中央アルプス、更には南アルプスの山々も望め、富士山はその上品なそして美しい姿を南に現わしていた。八日は、ゆっくりと体を休めた。九日、四時三十分、小屋に別れを告げた。小屋はまだ明けきらぬ闇の中に、ひとりさびしく立ち、一行との別れを惜んでいた。皆、「さようならー」「さようならー」と口々に云っていた。松原湖駅に出、そこから小諸に行って信越線で家路についたが、車中の暑さもものすごく、皆、悲鳴をあげていた。

良書案内

読書のシーズンを迎えてあれやこれやと手を出したくなる折、文学の園に入ってみましょう。

文学鑑賞の入門書を与えるのには色々意見があります。一、白紙の状態で読み読んでいるうちに鑑賞力が高まる。二、相当読みとれて意見を持つ様になってから与えればよい。三、初めから与えてそれに従って読むのがよい。と、どれがよいとは今の所一寸云えませんが、文庫本、選書本位やりに入門書も相当出てますから紹介します。

「文学入門」桑原武夫著　岩波新書

この徒のさきがけとなったもので文学を社会的に眺め、レクリエーションとしてこの文学の価値を明らかにし、読者との関係を離れず文学を説いている点、鑑賞そのものの意義を考える上で参考になります。五章に分れていますが、最後の「アンナ・カレニナ読書会」は抽象的なものより救い具体的にした点、見るべきでしょう。巻末の「世界近代小説五十選」これこそ良書案内だと思います。

次に「文学入門」阿部知二著　河出市民文庫

昭和十四年「文学論」の加筆修正したもので、目的としては文学というものが我々人生の中でどの様な意味をもつものであるかと云う事を、謙虚に探ろうという心のある人たちと一緒に、お互いに膝を交えて語るように考え合いたい気持で、ヒューマニズム文学という角度から書いたのである、といっている。桑原氏の近代文学として近代性を主張し日本文学を蔑視しているのに、阿部氏のは日本古典をも重視し、温和な高き教養の為の文学という薫りがある。その他の読書には「文学の常識」中野好夫、要書房。「文学とは何か」加藤周一、角川書店。「文学序論」熊谷孝、磯部書房など。

中野氏のは平易に具体的な例を多く引用して説いている。加藤、熊谷両氏のは一寸見劣りがする。

（今月は国語の江口先生にお頼みした）

河童天国　海のキャンプ

長い暑中休暇を彩る河童天国海のキャンプは、七月二十二日から八月十三日迄、参加全員三五七名を五班に分けて、お馴染の鶴居海岸で行われた。高校と中三の一部が第一回で、これを皮切りとして発育盛り、悪戯盛り、食欲も又物凄い成長期にある連中が、この時と許り泳ぎまわり、飛び歩き、食い荒した―かどうかは保証の限りではないが、いずれも愉快な四日間を送ったことは間違いない。天候も又稀に見る晴天つゞきで、海水の減退が気ずかわれる位だったから、食後の一時間まで遠慮なく、塩水のからさを味い声帯が破れん許り空気を震動させた。此の間に知らず／＼、栄光精神―協和努力の気風が養われたことは云う迄も無いのだから、キャンプの味は忘れられない。以下全般的にキャンプの大体の模様をスケッチしてみよう。

○

三年、高校混成の第一班は午後六時に、他は翌午前八時、浦賀駅に集合し、徒歩又はバスでキャンプ場へ向った。今年は例年に反して、皆の荷物を運んで呉れるジープの出ぬ事に、すでにこのキャンプに経験をつんでいる二年以上の生徒の中には、相当頬をふくらした者もあったようだ。キャンプは毎日々々、空の底の突抜けるような好天気に恵まれ、昼は一日中の水浴に、余興の運動会、ウルフ先生の伸泳ぎや、本尾先生のクロール、平泳のウエーバー先生などが目に附いた。生徒の方では、金槌流の免許皆伝をエンリヨ勝ちに披露して呉れた者もいくらか居たようである。夜は夜で、一同食堂に集り、エネ大会や歌の会など、種々の催しに時のたつのも忘れた。

●

灼熱の太陽にさらされて、肩が赤焼けした者も大分出たようだが、意気沮喪したものは一人も出なかったのは頼もしい。夜の消燈後も皆ねつかれぬかして、ボソ／＼云うさゝやきがもれていたが、皆いつの間にか眠ってしまい、朝には「よくも／＼」と感心する程の方向転換をした者もいたそうな―。先生方も生徒も、皆一心にキャンプを楽しくする事に力を尽したが、殊に第一班に参加されたチエルマーク先生は、アメリカへ行く富士産として、取っておきの珍芸を披露して下さり、ついには発熱される程の大奮斗には、一同感謝するの他はない。こうして連日連夜の楽しい催しに、うつゝを抜かして日のたつのも忘れていた一同は、四日目になつかしい思い出を胸に抱きながら、キャンプ生活に別れを告げた。

クリュエル先生就任

今学期から中二の英作文を担当される事になった、クリュエル神父様（Laurenz Kruer）は、校長先生ヘルヴエッグ先生ウルフ先生と同じドイツの中西部、ウエストファリス州出身で昭和十年六月に日本へ来られた。今、修道院の日本語学校の校長先生をしておられる。名前を日本語で書くと、狂得（クルエル）ではなくて、栗谷（クリヤ）だそうだ。「御趣味は」と聞くと、「スポーツは下手ですが水泳ですね。学問の方は古典語学と歴史です」といかめしいお顔をやわらげ、巨大な体をゆすらせて笑われた。

新部長をむかえ張切る　蹴球部
クリスマスを目標に　学校劇部

蹴球部

蹴球部は、部長ウエーバー先生が学校を去られて、同じブラジル人のスタール先生が新部長に就任された。現在では技術からいっても部員数から云っても、到底対外試合のできるような程度ではないが、新部長就任と共に、今までの部内の無統一と練習の無秩序も改められ、キャプテンには高部　君、中部　君が決定した。現在中学二年以上の部員募集が行われている。

学校劇部

長い間学校劇部の為に献身的な努力をなって来た高二江沢君が今度都合でやめる事になった。この事を部は非常に残念に思っているが、部長のバトンが今回先生から生徒へ移り、上級生は今までにも増して部を指導する必要があるので、その為にも今後江沢君を客員として遇しその指導をも受け色々と相談にのってもらうように決定した。今まで本尾先生が部長として部を指導し、今日のような立派なものにして来られたが今回部長の役を退き後任には高一の　君がなる事に決定した。勿論今後共先生は部の指導をなさるが、今後の部の上達こそ本当の意味での部の上達。部員一人一人の上達と云う事ができよう。今学期の主な練習項目は、下級生が　両君の指導で脚本の朗読を練習する。上級生は参考書を使用したり、実際にやったりして演出の研究をする。又今学期には是非良い劇を見に行きたいそうだ。クリスマスには二つの劇をやる予定でその一つは、上級生が演出して下級生がやる劇、もう一つは、上級生が自分達だけでやるもので少し大人向のものをやりたい。しかしこのやるものについてはまだ未定であるが、いずれもクリスマスに関する劇を取り上げる予定。「演劇部に対して希望注文があればいつでも意見を聞かせて下さい」との『お願い』があった。

豆ニュース

▼本校最初のレコードコンサートが、九月十五日放課後催された。尚主催者側では「今後この催しは月二回位催したいと思っている」とのべた。

▼九月十四日四時より、本校生徒中の希望者は浦賀ドックに貨物船「彦山丸」の進水式を見学した。

▼夏休中、事務館に会計室、購売部等の新室が開かれ、同館二階の教員室は少々広げられた。

▼又高校々舎には、新教室が作られ、中学校舎の方では、もとの三B教室が、合併教室となった。